

# リト デビルーク王への 道

童貞中学生

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主がリトに憑依してハーレム作る、テンプレ物語です。オリ主はT o L O V E rのことは知りません。

T o L O V E rにオリ主いらねえという方やT o L O V E rはリトさんがヒロインだろという方はたぶん合いません。ご了承ください。

最初はR18での投稿予定でしたが、童貞にはハードルが高すぎて、一般での投稿となりました。アドバイスや批判など受け付けております。

※アンチヘイト、残酷な描写、ガールズラブタグは保険です。前投稿した奴ですが間違って消してしまったので、もう一度チャレンジです。

# 目次

プロローグ	1
小学生時代	

1話	目覚めは病室で	7
2話	学校での話	13
3話	秋穂さんと	22
4話	仲良し3人娘と	36
5話	悩める乙女と新たな家族	51
6話	デートな彼女と高貴な彼女	62



# プロローグ

宇宙創生以来、歴代の王の中で一際強大な王とさえ言え、宇宙史を少しでも学んだ人物であれば口を揃えて「ギド・ルシオン・デビルーク」と答えることだろう。ギド王は延々と続いていた第6次銀河大戦をその類稀なる戦闘力を持つデビルーク人の中でも一頭飛び抜けたその強さによって集結させ、初代デビルーク王として君臨した王である。

彼の戦闘力の高さは遙か遠い未来の今でも畏怖され、彼の修行時代からの人生の記録は英雄譚として語り草となっている。

しかし、彼は霸王の器はあっても賢王の器では無かったようである。そんな彼に変わって政治の一切を取り仕切ったのは彼の妃である「セフィ・ミカエラ・デビルーク」であった。彼女は宇宙一美しい容姿と声を持つ少数民族であるチャーム人の最後の末裔であった。種族問わずあらゆる生物の雄を魅了したその美しさはもはや能力の域に達しており、数多くの犠牲を生んだあの銀河大戦の発端は一人のチャーム人を巡っての争いだったという説もあるほどだ。いつの時代でも男は大抵愚かな生き物である。

そんな彼女だが、その生い立ちのせいが大変敵かだったようで、ギド王が妻を一人しか取らなかったのは彼に魅力がなかったのではなく、彼女が徹底したハーレム否定派

だったからであつたという。彼の霸王でさえも妻には頭が上がらなかつたのだから、女は強しといえよう。

次に歴代の王の中で一番素晴らしい王は誰かという議題ではギド王とセフィ妃の第1王女「ララ・サタリン・デビルーク」の夫、2代目デビルーク王「リト・ユウキ」の名が多く上がることだろう。初代ギド王が大戦を終わらせたというものの、「永きに渡つた戦火の跡は消えず、外交を務めるセフィ・ミカエラ・デビルークの辣腕を持つてしても、大小問わず小競り合いが続いていたという。

そんな現状を打破しようとしたリト王は、しかし、特別強かつたわけでも、賢かつたわけでもなかつた。何故なら彼は当時娯楽文化のみにしか価値を見出されていなかつた発展途上惑星「地球」出身の地球人だつたからである。それでも誰かの為、民の幸せのために足掻き続けたリト王の姿は人々の心を動かした。彼には天性の人誑しの才能があつたという。彼の志に賛同したものが急激に増え始め、人々を蝕み続けた争いは激減していった。

たつた一代で大戦を終わらせたギド王を武の王だとしたら、彼は絆で持つて争いをなくした徳の王である。

そしてリト王は数多の妻を娶つたことでも有名である。地球人からデビルーク人、メ

モルゼ星人から果ては生物兵器まで、多種多様な種族の妻を娶ったりト王は人誑しの才は勿論のこと女誑しの才も持ち合わせていた事を意味している。彼女たち全員を毎晩愛しても翌日には疲れたそぶりも見せなかった、という逸話は現代にまで伝わっている。

沢山の良縁、子宝に恵まれた彼は今でも「稀代の種馬王」として慕われ？、彼の銅像とともに縁結び、安産、子授けのご利益があると崇められている。彼の銅像の股間部分を撫でれば、次から次へと良縁が舞い込んでくるという惑星伝説まであるのだから悔れない。徹底したハーレム否定派のセフィ女王と本当はハーレムが作りたかったという言葉を残したギド王の心中は察するに余りある。

今回はそんなリト王の半生を振り返ってみたいと思う。

粹

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

伝記 「リト・ユウキ」プロローグより抜

1人の男がいた。彼はどうしようもない程のお人好しで友人にも度々注意をされるほどだった。困った顔をしている人がいれば老若男女問わず、首を突っ込んで笑顔にし

ていく、そんな時代によつては聖人君子と崇められる程の人格者であつた彼だが、正直者が馬鹿を見る現代においてそんな彼は悪意を持つた人からすれば格好の的だつた。善性の彼がそんな悪人の罠を見抜けるわけもなく、理不尽にも陥れられてしまった。

そんな中でも足掻こうとしていた彼に手を差し伸べたのは今まで彼が救つてきた人々だつた。自分たちを救つてくれた、自分たちに笑顔をくれた彼のためならと一人、また一人と次々に彼を救うために立ち上がった。こうして救われた彼は人の為に行動する事は人と人とを繋げていくことができるのだと確信し、今度は人の力を借りながら、面倒ごと<sup>まごご</sup>に首を突つ込んでいった。生まれながらのお人好しはこんなことでは揺らがなかつたのだ。

こうして沢山の人に囲まれながら人生を歩んだこの男にも当然欠点というものが存在した。それは女性に対して気が多かつたことだろう。男の優しさに惹かれた多くの女性に愛されたが、誰かを悲しませたくないというある種病気のような性格をしていた彼はその愛に全て答えていった。当然女性たちは最初は受け入れられなかつたその男の考えは、しかし、惚れた弱み故か受け入れてしまふ女性たちが大半だつた。

そしてその人生は享年80年と少しという大往生で幕を閉じた。最期の時まで人々に慕われていた彼は安らかな顔で眠つたという。

その眠ったはずの彼は唸っていた。死んだはずの自分が意識を持つていることに疑問を持つていると神を自称する何者かに話しかけられた。ここがあの世界かと納得していた彼に神は他の世界に転生してみないかと話を持ちかけた。詳しく聞けば、人生で徳を積みすぎた人は天国で過ごす時間があまりにも長くなりすぎ、逆に地獄のような退屈を背負ってしまうという。

それをあまりにも不憫に思った神々が次の幸福な人生を歩んでもらい天国にいる期間を短縮しようと考えたようだ。当然次生で悪行を積み過ぎれば地獄行きに変更になることもあるらしい。

贅沢な悩みだなど考えながらも、自分がこの話を受け入れないと神々が困ってしまうと考えた彼は、その話を受けることにした。転生してしばらくしたら、記憶が戻るらしい。自称神は喜び、次の人生を幸福に過ごす為に徳ポイントを使って「特典」なるものを与えてくれるという。

しかし、自分が善行を積めたのは支えてくれた人たちのおかげだという思考に至った男はそれを自分が遺した人々のために使つて欲しいと言った。男も譲れなかつた一線である。神は男の意思の強さをみて渋々了承し、転成を完了させた。男には内緒で「特典」を与えて。

余り派手なものは男が気にするかもしれないと考えた神は地味だが役立つものを見繕った。

主人公補正という特典。これならば良いだろうと選んだものだが、うっかりな神は（エロゲ仕様）という文字を見逃してしまっていた。

# 小学生時代

## 1話 目覚めは病室で

眩しさに顔を歪めながら、少年は目を覚ました。白い部屋のベッドの上で眠っていたようだ。病院の様に感じられる。記憶を掘り返すと今までの12年の人生の記憶と同時に前世の記憶も蘇った。どうやら本当に転生をしたらしい。あれは死ぬ直前に見た夢だと思っていたが事実は小説より奇なりだ。

素直に受け止めよう。自分は「結城リト」、4大家族で彩南町に住む小学6年生だ。今の自分もなかなか無鉄砲のお人好しの様で、生まれ変わっても変わらない自分の性質に呆れるやら、嬉しいやらの感情でいた。前世の事をあっさりと受け入れていたが、前例もないし、案外こんなもんかと思っていると自分の寝ているベッドに他にも人がいることに気づいた。

ウエーブのかかった黒髪で可愛らしい少女。妹の美柑だった。いつもは結っている髪が下されていて、目元は赤く腫れている。自分がここで寝ている経緯は思い出せないが、病院という場所から考えて、妹に心配をかけてしまったことに胸が痛む。そういえばあの自称神が記憶を取り戻す時に体調を崩すかもしれないとか言っていた気がする。

何時もは勝気で兄よりしつかりしている妹だが、まだまだ慕ってくれてる様で嬉しい。先程から感情の揺れが年相応になってしまっていることに気づいたが、泣いてる妹の前では些細なことである。

「ごめんな、美柑。兄ちゃんもう大丈夫だから」

そう言いながら美柑の頭を優しく撫でると辛そうな顔をしていた美柑の顔が笑顔になった。その可愛い笑顔に少し見惚れていると、ドアの外から足音が聞こえてきた。

「おう、リト起きてたか！ 大丈夫かあ!？」

「チョット！ パパ！ 病院では静かに!!」

騒がしい声とともに入ってきたのは、結城リトの両親である。リトをより大人にして熱血風味を加えた男が父「結城才培」であり、多数の連載を抱える今売り出し中の漫画家である。そしてリトと同じ茶髪を持ち、一目で仕事のできる女だと分かりそうな雰囲気。その女性は母の「結城林檎」である。林檎は雰囲気通りの世界をまたにかけたフアツシヨンデザイナーであり、2人とも忙しい身の上の筈なのにわざわざこうして揃って来てくれるのは申し訳なきよりもやはり嬉しいの方が勝ってしまう。つくづく自分は周りの人に恵まれている。感情が年相応のものになっているがこれも転生した影響か、と考えるながら両親に話しかける。

「親父大丈夫だよ。心配してくれてありがとうな」

「親父い？なんで急に親父なんて……まあ、いいか。本当に大丈夫そうだな。急に熱が出てぶつ倒れた時にはどうしたもんかと思っただが」

「ごめんなさいねリト。パパから電話もらって飛んで来たんだけど、遅くなって。もう起きて大丈夫？」

「いいって。来てくれただけで嬉しいし。本当に大丈夫だから」

「そう、良かったわ。売店で果物と飲み物買って来たんだけど、食べれる？」

「うん。ありがとう。食べるよ」

林檎から貰った食べ物を食べながら、自分が倒れたときのことを聞いてみると、急に熱を出して倒れてから、2日目覚めずにうなされていたらしい。林檎が着いた頃にはもう熱も下がりがいつ目覚めてもおかしくないと医者に言われたため、必要なものを買に行ったそうだ。それは美柑も泣く筈だ、と胸が痛み、もう一度美柑の頭を撫でる。

「パパ、電話で大変だったのよ。リトがあく、リトがあく、って。フフ、よっぽど心配だったのね」

「いやあ、俺も父親らしくなって来たと思っではいたが、まだまだだったな。ママのありがたさが改めてわかったぜ。電話したらすぐ用意するものとか言ってくれてよ」

「やだっ、パパったらく、愛してるだなんて」

「ん？ そんなこと言ったか？　がはは、まあいいか。愛してるぞお！　ママ」

息子の前で惚気出す両親に少しウンザリするが仲が悪いよりよっぽどマシだと思直す。今回の人生は前の人生のオマケだと思っていたが、こんなにも暖かな家族がいるのだ。そんな認識は失礼だし悲しいだろう。

「親父、母さん。俺2人の子供でよかったよ」

今の気持ちを素直に声に出して見た。言った瞬間に親父が少しだけ複雑そうな顔をしたが、次の瞬間には泣き出した。

「うおおお、いい子に育ちやがって。俺もリトと美柑がうちに来てくれて幸せだっ!!」  
「ええ、そうね。ママも幸せよ」

感情を顔いっぱい表す親父と違って、母さんは本当に優しい慈愛の表情で俺の頭を撫でて来る。

「うむう。リトお」

「お、美柑も起きたか。すまん、うるさかったな。美柑、リトが起きたぞ」

「ん?..... リトツ!!」

眼を覚ますや否や自分に抱きついてくる美柑。相当心配させてしまった様だ。3度目になってしまったがもう一度優しく美柑の頭を撫でる。

「もう! リトツ!! 心配したんだからね!」

「ごめんごめん。もう大丈夫だよ、美柑」

「ママ達もいるわよ」

「うわっ！ ビックリした」

「この子ったらリトしか目に入らなかつたみたいね」

「がはは、美柑はリトのことが大好きだからな」

美柑は顔を真つ赤にして俯いてしまった。その様子は大変愛らしい。親父がチラリと病室にかかっている壁時計を見る。

「悪いな、リト。俺今日の夜が締め切りの仕事があるんだ。ママと美柑は泊まってい  
くらしいから、俺はそろそろ出ないとまじでやばい」

「ああ、来てくれてありがとう。俺を気にせず頑張ってくれよ。親父の漫画俺も楽しみ  
にしているだから」

「おう！ 元氣出たぜ。本当に悪いな。終わったら猛ダツシユで帰ってくつからよ」

「パパ、気をつけてよ。テンション上がると周りが見えなくなるから」

「本当だよ。デリカシーないし、いびきうるさいし、足臭いし」

「うお辛辣だな。ちつとはリトを見習えよ」

最後まで騒がしく親父は仕事に向かつて行った。病院ではどうかと思うが、個室だ  
し、俺を元氣付けるためだったんだらう。感謝しかない。看護師さんに怒られたら庇え  
ないが。

「じゃあ、一応大事をとって寝ましうか。リト眠れそう？」

「うん。食ったら眠くなつて来た」

「わ、私もリトと一緒に寝る」

「はいはい。じゃあ、ちよつとお医者さんと話して来るから、待つててね」

母さんはそう言うのと病室を出て行つた。隣を見ると早速美柑がベッドに潜り込んでいた。俺と目が合うと「えへへ」と笑いかけてくる。うちの妹が可愛すぎます。神様ありがとうございます。

あの後医者が増えて色々話したが、熱で倒れた原因は不明だったそう。精密検査をしても異常は見られなかつたらしい。疲労からのものだったと言う結論で落ち着いた。親父達が罪悪感を感じている様で、俺は理由を知っているが、本当のことを話しても今度は違う病院に連れていかれる可能性もあるので言えなかつた。うちの両親なら信じてくれるかもしれないがこれ以上心配をかけたくなかつた。家族会議の末両親とももつと頻繁にうちに帰つて来ることになった。申し訳なく感じたが「親に遠慮すんな」と言われ何も言えなくなつた。美柑もそのことはかなり喜んでる様で、しっかりしていてもやはりさみしい思いをさせてしまつていたのだろう。俺もこれまで以上に甘えさせることにしよう。

## 2話 学校での話

そう言う形で決着がついたこの騒動だったが、無事に退院できた俺はこれからの方針を考える。12歳で何を言ってるのかと思われるかもしれないが、病室でも思った様に折角新しい人生を貰ったのだ。悔いのない様に両親と美柑が誇れる様な自分になりたい。

前世を思い返して見ると確かに色々な人に恵まれ、たくさんの笑顔にあふれた人生だったが、満足のいかなかった結果になってしまったこともあった。もつと自分が賢ければ、もつと自分が強かったら、俺が1人でできることなんて高が知れているが、それでもそう思わずにはいられなかった。自分を高めよう。自然とそう思えた。あまり先の目標を立てすぎるとがんじがらめになってしまいそうだ。なにかあったときに自分の全力を出せる様に。

今まで嫌いだった勉強も進んでする様になった。美柑や両親には信じられないものを見る目で見られた。失礼なやつらだ。前は運動の方が好きだっただけなのに。

後は武道ぐらいしか思いつかなかった俺はなんとか両親に頼んで見た。最初は倒れたことも気にして渋っていたが、大切な家族を守りたい、困っている人を助けたい。そ

のためにはいろんな事を経験したいと正直に自分の気持ち話を話した。すると親父が「男がここまで言ったんだ。やらせてやろう」と言ってくれた。この時の親父はカッコよかった。美柑にカッコつけすぎと言われて撃沈していたが……妹よ、もうちよつと親父に優しくはしてくれないか？

こうして近所の道場に通うことになった。なんでもここのおじさんが凄いい人らしく、背中にフアスナーっぽいのが付いてたり偶に触手みたいなものを出すそれがそれ以外は普通のためちやくちや強いおじさんだ。あ、あと名前が「ワシツ・ヨーイ」といかにも偽名くさい。うん改めて謎だ。その道場に行つて初めてわかったことだが、俺は回避術と体の頑丈さがハンパなかった。道場には俺より年上で体も大きい子達が多いが回避に徹したら、全く当たらない。師匠には「回避術だけなら宇宙でもトツプクラスの才能だ」と褒められた。大袈裟だと思つたが、素直に嬉しかった。けど、師匠には余裕で投げ飛ばされる。ころころ地面を転がりながら、本当に何者だ。と考える。

自分の時間を作つてしまったために美柑との時間が減るのではと心配したが、そんなことはなかった。俺のやることにいろいろついて来てくれるのだ。流石に武道だったりは危ないので、ちよつと体を動かしたら、俺の師匠との稽古を見学している。一度退屈じゃないか聞いて見たが、「リトがカッコいいから見てて楽しい」と照れながら言われた。ウチの妹の可愛さは宇宙でもトツプクラスだと思う。ただ師匠にコロコロされて



勿論ちゃんと学校にも通っている。ここでもちゃんと勉強していたら、信じられないものを見る目で見られた。本当に失礼なやつらだ。

朝いつも通り美柑と別れて自分のクラスに向かう。俺は6―Aのクラスだ。どうでもいいか。どうも前世の記憶があるせいで保護者意識が抜けず学校の友達たちには過保護になってしまう時がある。近所のお兄さん目線で同級生を見ている自分に気が付いた。

「おーつす。リト、おはよう」

「おう。おはよう、猿山」

入室して早々俺に声をかけて来たのは、「猿山ケンイチ」一応、俺の小学校からの幼馴染だ。猿山は少しサル顔で性欲も猿並みに強い。幼稚園の頃からもうすでにそうだったようで、子供の特権をフルに使っていろいろとイタズラをしていた様だ。早熟を通り越しておっさんかよと呆れたが、このままではいずれ捕まってしまうのではと考えた俺は猿山調教訓練を施した。今ではだいぶマシになったこいつだがそれでもいざという時の行動力は凄まじいものがある。大抵はそんなことに……と思うのだが、将来ひよつとしたらすごいやつになるのではと密かに思っていたりする。

「今日お前日直らしいぞ」

「あ、そうだった。ありがとな、猿山」

他にもクラスの奴らと挨拶をしながら今日の日直の相方を探して見る。荷物はある様だったので職員室へと向かう。真面目な彼女のことだから、多分もう先生のところへ仕事をもらいに行っているだろう。

「失礼します」

挨拶をして入り、室内を見渡すと案の定先生と彼女がいた。やっぱりいた、そう思いながら彼女「西蓮寺春菜」と先生に声をかける。

「おはようございます」

俺が声をかけると先生ははつきりと挨拶を返してくれたが、西蓮寺は恥ずかしそうに俯いてボソボソとおはようと返してくれた。

藍色のショートヘアで上目遣いにこちらを見はアメジストの様な瞳は潤んでいてそれがどうしようもないほどの庇護欲を掻き立てる。いつもは騒がしい二人組と一緒だが今日はまだいない。

西蓮寺とは最近話す様になった。彼女が複数の男子にからかわれていたところを助けたというありきたりな話だ。どうもからかっていた男子たちも西蓮寺に気があつて構つて欲しかったからちよつかいをかけたらしいのだが、そんなことじゃ嫌われるぞ、と声を掛けたらすぐに謝罪しに行つた。根はいい子達なのだ。今では俺のことをなぜか師匠と呼び、女の子にモテる秘訣を聞いてきたりするけど今は置いておこう。それ以

来どうも西蓮寺には好意を向けられているっぽいのだが俺としては相手が小学生なので戸惑っている。きっかけもあんな感じだったし、思い出補正でよく見えているのかもしれない。

そのあと先生にちよつとした指示を出されて職員室を2人で退出した。

「結城くんってさ……」

西蓮寺が唐突に言い出した。

「最近大人っぽくなったよね」

「そうかな？　俺からしたら西蓮寺の方が大人っぽく見えるけど……」

「ううん。結城くん元気になつてから、なんか頼りになるっていうか…… あつ、前が

頼りなかつたとかじゃなくて…… 前より落ち着いてるっていうか。里紗も未央も

言ってるよ？」

慌てている姿も可愛いがよく見ているなあ、と思う。自分の前世での小学6年の頃な

んで外で遊ぶことしか考えてなかつたのに。変わった自覚はあるのだが。

「まあ、色々あつてね。ちゃんと頑張らなきゃやって思つて。何か困つたことがあつたら

いつでも頼つてくれよ。できるだけ西蓮寺の力になりたいからさ」

「……っ」

西蓮寺が勢いよく向こう側を向いた。髪の間から見える耳は真つ赤に染まっている。

恥ずかしいことを言った自覚はあった。前世でもお前の言葉はいちいち真っ直ぐで聞いているこつちが恥ずかしいとはよく言われたことだ。それでも想いを口にするのは大事だと思つてゐるから、変えるつもりはない。

「あらあら、何やら甘酸っぱい空気ですなあ」

「ほんとほんと。春菜顔真つ赤だね」

騒がしい子達がやつて来た。先ほどの話でも出ていた「粂岡里紗」と「沢田未央」だ。粂岡の方はお洒落に気を使つて背伸びをしたい年頃なのか所謂おませさんで俺をからかおうとしてくるが、最近は逆にからかつてあげると顔を真つ赤にする可愛い子だ。沢田の方はフアツションとか服関係に興味があるらしく、うちの母親のこともあつてよくそのことで話したりもする。3人とも見た目も性格も趣味もバラバラだがいつも一緒にいることから相当仲がいいのだろう。

「私たちも混ぜてよお」

「キャツ」

粂岡が西蓮寺に抱きついて胸を揉み始める。粂岡はその名前にはじないくらい女の子の胸を揉んでいる。大抵ターゲットは西蓮寺で、沢田も悪ノリするのだが。

さっきのやり取りから立ち直つていた西蓮寺がまた顔を赤くして声にならない叫び声を上げている。粂岡たちは春菜も大きくなつたねと言つているがどこがとは聞か

い。そろそろ止めないと周りに人が集まってしまいそうだ。

「靦岡その辺にしといてやれよ。西蓮寺は恥ずかしがり屋なんだから」

「なあーに、結城つてば私達に混ざりたいの?」

靦岡が挑発的な笑みを受けてそう問いかけてくる。後ろでは沢田がまた始まったと苦笑している。西蓮寺は口をパクパクさせて心ここに在らずだ。い

「そういうのは好きな人同士でやるもんだぞ。あんまり西蓮寺をいじめてやるな」

「んふふ、なら私としてみる? 私結城のこと嫌いじゃないし」

「なっ!! 里紗っ!!!」

西蓮寺が大声をあげるが、靦岡の言葉を全て間に受けていたらこっちがもたない。記憶が戻ってからというものの性欲がどこで膨らむか分からないのだ。あまりそういう刺激を今の俺に与えないでほしい。ちよつと懲らしめるつもりで靦岡に近づいていき頬に手を添え、目を合わせる。

「じゃあ、してみるか? 俺も里紗の事は好きだぞ?」

ポカンとした表情を浮かべた靦岡だったが、やり返されたことに気づくと悔しそうに顔を歪め赤くなった頬を誤魔化すようにそっぽを向いた。転生してから自分がちよつとSっぽくなっているような気がするけど気のせいだろうか。

「…… 生意気」

「はいはい。生意気で悪かったな。」

「あはは、また里紗の負けだねえ。もう懲りればいいのに結城には効かないんだから」

「もう里紗!! 冗談でも好きとか言っちゃダメだよ!! そういうのはもっと大切な時に……」

糸岡は西蓮寺が言い切る前にこちらを向き、悪戯な顔をして言った。

「冗談じゃなかったりして」

「どういう意味!?!」

その顔に一瞬見惚れポカンとなった俺を他所に糸岡は教室に向けて歩いて行った。西蓮寺も慌てて後に続く。沢田もじゃあまた後でと言いながら2人を追いかけて行った。

ポツンと残った俺は窓から快晴の空を見上げながら呟いた。

「最近の小学生は進んでるなあ」

## 3話 秋穂さんと

その日は学校から帰って美柑と母さんが夕ご飯を作ってくれというので、デザートでも買いに行こうと思い、2人の要望を聞いてから家を出た。季節は秋を迎え、肌寒くなつて来た頃だった。商店街を歩いていると向こうから見知った人物が歩いて来ていることに気づいた。

「秋穂さん、こんにちわ」

俺が声をかけると向こうもこちらに気づいたようで、笑顔になった。彼女は「西蓮寺秋穂」苗字の通り西蓮寺の姉で彼女の家みんな遊びに行つた時に知り合つた。今彩南高校に通っている女子高生で将来は雑誌の出版関係の仕事につきたいらしい。そんな彼女は西蓮寺の姉だけあつて雑誌に載るモデルを務めても良いくらいに容姿も整つていてスタイルがいい。西蓮寺姉妹の仲は良好で見えていて微笑ましくなるほどだ。

「あら、結城くん。奇遇じゃん。お買い物？」

「はい。家族の分のデザートでも買おうかなつて思つて」

「おお、えらいえらい。家族を大切にできる男の子はお姉さんも好きだぞ」

そう言つて彼女は俺の頭を撫でてくる。前世から数えて結構な年の差があるはずだ

が、体相応の精神でもあるのでこの魅力の前では抗えない。

「秋穂さんも面白い物ですか？」

「ううん。ちよつと友達と待ち合わせをね。その間に商店街をウロウロしてただけ」

噂をすればなんとやらで秋穂さんと同じ制服の女子高生が目に入った。どうやら待ち人が来たみたいだ。秋穂さんの友達も交えて3人でしばらく話していたが、少しして俺はそれじゃあと行って別れようとしたが秋穂さんの友達に話しかけられた。

「君小学生なんだって？　落ち着いてるねえ。」

うちの弟なんて君より年上なのにまだまだガキっぽいんだよね。そうだ、よければ一緒にこれから遊ばない？　お姉さん達が奢ってあげるぞ」

「ちよつと。朱美。結城くんも用事あるんだしダメよ」

秋穂さんはごめんねと言いながら、友達を連れて行こうとするが、何が彼女を駆り立てるのか彼女はなかなか離れようとしなない。別に買い物も急ぎではないので仕方なく俺は彼女達について行くことにした。もちろん奢られるつもりはない。親の仕事をたまに手伝うおかげで小遣いは同級生達よりは多いと思う。

それからは3人で色々と遊んで回った。ゲーセンやショッピング諸々女子高生の面白い物好きはこの世界でも健在だったことを思い知ることになったが、それでも楽しそうな2人を見るだけで俺も付き合ってたよかったですと思えた。

遊びまわっていた俺たちは一段落したところでオープンテラスのあるカフェに行くことになった。流石に遊びまわって疲れがたまってきたらしい。オープンテラスの一席に座って注文した飲み物が来たところで朱美さんが切り出した。

「それで？ 結局秋穂と結城くんはどういう関係な訳？」

「関係ってさつき説明したじゃない。妹の友達よ」

「そういう意味じゃなくて、男女の仲なのかって話」

「ブフツ」

秋穂さんが飲んでたココアを吹き出した。そつとハンカチを差し出すと、彼女はお礼を言つて受け取り一通り拭いた後に文句を言う。

「ちよつとどう言う意味よ？ 相手小学生よ」

「だってさ秋穂あんなにモテるのに男友達なんていないし、全く男っ気ないじゃない。それで蓋を開けてみればこんな可愛い男の子と一緒にいたなんて邪推くらいさせてよ」

秋穂さんは悪かったわね、男っ気なくてと若干ふてくされながら反論した。

「だって学校の男子つて子供っぽいしどうも付き合うなんて発想に行かないのよね」

「なら結城くんはどうなの？ 秋穂は彼女としてどう？」

「ちよつ！ 小学生に何聞いてんの？」

「大丈夫だって、この子そこの高校生より大人っぽいし。ねえ、どう？」

急に始まったガールズトークに居心地が悪くなっているとこちらに話が振られた。

秋穂さんと恋人関係か。秋穂さんを見てみると何よと言いなからこちらを見てくる。彼女になつてもらえたらそれは嬉しい。綺麗なのもそうだが、彼女は本当に優しい女性なのだ。俺なんかにはもつたない。

「こんなに綺麗な女の人とそうなれたらそりや嬉しいですけど」

「おっ！　脈あり!?　良かったじゃん、秋穂！」

嬉しいんだって」

話しかけられた秋穂さんは満更でもなさそうにほおを緩めながら、髪をいじっている。なんとなく甘い空気が漂い始めた時、唐突に男の声が聞こえて来た。

「そこにいるのは秋穂くんじゃないか！」

「うげっ」

秋穂さんが声をかけられた方を向いて女子にあるまじき声を上げる。俺もこちらを向いてみると2枚目な顔をした男が歯をキラリと輝かせ、取り巻きを引き連れながらこちらに歩いて来た。すごく光つてると思ったら取り巻きのやつが何か鏡に太陽の光を反射させ2枚目の男に当てている。どうりで眩しいわけだ。

「ああ、こんなところで会えるなんて!!　もはやこれは運命としか言いようがない!!

結婚してくれ、秋穂くん」

「さすが弄光センパイだぜ!! 学校からつけて来てたのに偶然を装ってる!!」

「ああー、はいはい。すごい偶然もあつたものね。私たちは用事があるから、じゃあここでバイバイ」

どうやら俺たちはこの2枚目さんにつけられてたらしい。全く気づかなかつた。これは師匠にまた転がされる。素っ気ない秋穂さんの言葉を受けても全く堪えた様子を見せず懐から何かを取り出した。

「おつと、こんな所にたまたま映画のチケットが2枚もある。良かったら一緒にどうだ  
い? 秋穂くん」

「さすが弄光センパイ!! 相手の都合は全く聞いてないぜ!!」

「弄光君、顔はいいんだけどねえ。それ以外がダメすぎるんだよなあ」

朱美さんの辛辣な言葉も全く耳に入っていない様子で秋穂さんを口説いてる。一気に賑やかになったな。騒がしいのは嫌いじゃないが流石に秋穂さんが困っているの  
ちよつと声をかけてみよう。

「お兄さん、お兄さん」

「おつとなんだい? ボク。今お兄さんは大人な話をしているんだよ? ちよつと

待ってておくれ?」

「お兄さん、人を誘う時はもつと優しく相手の都合も考えないとダメですよ?」

「はっはっは。面白いことを言うね。僕はいつだって優しさと誠実さに溢れた男さ」  
「でもさつきから秋穂さん嫌がってますよ?」

「うぐっ」

「さすがセンパイだぜ。子供に正論言われてる!!」

そういうと言葉に詰まった弄光センパイ。なんだあしらわれても全く気づかないメンタル強いやつかと思つたら、気づかないふりをしてただけか。ちよつと可哀想だな。「せつかくイケメンさんなのに勿体無いです。誘う時は相手を観察して本気で嫌がつたら引くことも大事ですよ」

他にも女性をデートで誘う時の方法や好感度を上げる方法、会話をするときなどのコツを話して見た。ドア・イン・ザ・フェイスとかミラーリング、ペーシングなど。俺も知人の受け売りでそこまで詳しくはないのだが、これだけの取り巻きというか後輩に慕われてるといふことは結構いい人なんだろう。こういう人はちゃんとしたコミュニケーション能力を学べばいろんな人にすかれるようになると思う。これから役立ててほしいものだ。

「うう。ありがとう!!」

正直ここまで人とうまく話せたのは初めてだ!! 本当に

楽しかった!!」

「それは良かったです。お兄さんはチョットだけ相手のことを考えて会話できるように

なればすぐに人気者になれると思いますよ」

「ああっ！ 君のアドバイスはちゃんと胸に刻み込んだ。おっと映画の始まる時間だ!! 少年一緒にどうだい？」

「僕はそろそろ帰らないといけないので…… すいません」

「そうか。それは残念だ。それではまた会おう！ 少年！」

「あつ、センパイ待ってくださいー!!」

なんか納得して帰って行っただけど、秋穂さんを誘いに来たんじゃないのか？ まあ結果オーライか。というか映画は行くんだな。

「すごいね!! あの弄光君相手にあんなに話せる人見たことないよ!!」

朱美さんが興奮した様子で話しかけてくる。まあ、あの人は悪い人じゃないけど自分で本位で話す人だから、あまり会話はうまくいかないだろう。秋穂さんの方を見ると明らかにホツとしていた。これまでも困ってたのなら、これからは良くなってくれればいいんだが。

「ありがとう、結城君。毎回断つても断つても全然聞いてくれないから困ってたんだ」「いえ、秋穂さんの助けになれたなら嬉しいです」

そういうと頬を掻きながらまたありがとうと言って来た。

「まあた私を除け者にしていい感じになってる!!」

朱美さんが大声をあげて再び漂い始めていた甘い雰囲気をかきつけた。

「いやーいいもの見たし。そろそろ時間遅いから帰ろっか?」

ということでお開きになった。家はすぐ近くなので送らなくても大丈夫という朱美さんと別れて、秋穂さんと2人で帰路につく。しばらく話しながら帰っているとポツポツと雨が降り出して来た。瞬く間に本降りになって来たので途中にある秋穂さんの家に寄らせてもらうことになった。お互いに濡れていないところを探すが無理な状態になっている。

「あー、もう最悪。結城君ちよつと待ってて。今タオル持ってくるから。」

「すいません。ありがとうございます」

すぐを持って来てくれたタオルで体を拭いていると秋穂さんはさつきかかって来た電話で話していた。この季節に濡れたままはマズイので急いで家に帰って風呂に入ることしよう。そう思っていたのだが秋穂さんの次の言葉で動きが止まってしまった。

「家族まだ帰って来てないみたいなんだけど、ウチでお風呂はいつていかない?」

「えっ?」

「両親は仕事だし、春菜は里紗ちゃんの家に行ってるんだけど今日は雨も降って来たしお泊まりするんだって」

電話きたと言いながら携帯を見せてくる秋穂さんだが、流石にそういうわけにはいか

ない。厚意は有難いが、まだ性欲がどこで膨れ上がるかわからないのに興奮材料の多い西蓮寺の家のお風呂なんてちよつとやばい。

「いや、俺帰つてからで大丈夫なんで…… ありがとうございました」

そう言つて出て行こうとした俺だったが、秋穂さんに腕を掴まれてしまう。回避術が仕事してない。

「なんなら一緒に入つてあげようか？ 今日のお礼も込めて」

「いや!! 本当に大丈夫ですから!!」

なんとか逃れようとするものの、もつれ合ううちに秋穂さんの色々なところが当たつて俺の息子が元気になり始めた。そのまま腰が引けて身動きが取れないでいると風呂場まで連れて来られてしまった。

「ほら脱がして上げるから」

「いや!! 分かりました!! 自分で脱ぎますから!!」

帰してくれそうにないので、しょうがなく自分で脱いでいく。秋穂さんの方をちらりと見るとこちらをガン見したままじつとしていた。声をかけて見ると息を吹き返したように動き出した。流石に今元気になつている息子を見られないように貸してもらつたタオルを腰に巻いて服を脱いでいく。どうしてもこんもりしてしまうが、先に入つてすぐ上がれば満足してくれないだろうか？

「先に入ってますね」

のろのろと動き出していた秋穂さんを置いて浴槽へ。西蓮寺たちが毎日ここで体を洗っていると思うと興奮が高まって来た。早く上がらなければと思うも彼女が許してくれるはずもなく、無情にも入ってきてしまった。

「失礼します」

入ってきた彼女は俺を見ると嬉しそうに近寄ってくる。

「はい、結城君。洗って上げるね」

抵抗する間もなくスポンジを持った秋穂さんに背中を洗われる。絶妙な力加減が心憎い。

「どう？　気持ちいい？」

「はい、ちょうどいい感じです」

しばらく背中を洗ってくれていたが満足したのか、声をかけてきた。

「はい、背中はおツケー。次は前ね」

「前はさすがに自分で洗います！」

「いいからいいから。遠慮しないで。春菜が小さいときも洗ってあげてたんだから」

そう言いながら、秋穂さんの手が前へと伸びてきた。止めようとするも器用に洗ってくれていた彼女の手が固い何かにあたり動きを止めた。言うまでもなく俺の息子であ

る。ああ、終わった。

「ん?..... あつ、そつ、そそそそうだよね。おおお男の子だもんね。しょうがないよ! 私全然気にしてないから!!」

「いや、はい、なんかもう色々すいません」

羞恥心と興奮で頭がごちゃごちゃになったが、あまり時間をかけると秋穂さんが風邪を引いてしまうかもしれないので急いで前も洗って湯船に浸かる。ここで出て行ったら完全に臨戦態勢になっているあれを見られてしまうので出るに出来ない。微妙に気まずい空気の中洗い終わった秋穂さんが湯船に入ってくる。入るとき足を上げたのでいろいろ見えそうになったので一応視線を外しておく。向かい合ってどう声をかけていいか分からないまま湯船に浸かっていると秋穂さんが喋り出した。

「朱美に言つてたこと本当? 私と付き合えたら嬉しいってやつ」

「えっ?それは..... 一応本当ですけど」

俺の言葉を聞くや否や秋穂さんが続けた。

「じゃあ、付き合おつか?」

水が湯船に落ちる音しか聞こえてこなかった浴室の中でその言葉はやけに響いた。

「それってどういう.....」

「私..... 結城君のこと結構前から好きだったのかも。朱美に言われて気付いちやつ

た」

「でも、俺はまだ小学生ですよ？　秋穂さんくらい美人だったら……」

言い切る前に秋穂さんの顔が目の前にきていた。遅れて柔らかくも癖になりそうな感触が唇に降りた。キスされたらしい。相変わらず働かない回避スキルだ。

「……キスしちゃった。しょうがないじゃん。好きになっちゃったんだもん」

自分の唇を指で撫でながら呟く秋穂さんはびつくりするほど色っぽかった。ああ、ダメだ。自分は相変わらず女性からの好意に弱い。好きだと言ってくれる女性を幸せにしたいという想いが込み上がってくる。これからもうこうして好意を示してくれる人に簡単に絆されてしまうのだろう。そのことを正直に秋穂さんに言わなければ秋穂さんを悲しませてしまうことになる。前世のことも話すか迷ったが、信じてくれるか分からないが話すことにした。好きだと言ってくれた人に隠し事はしたくない。このままだと逆上せてしまいそうだったので、風呂から上がって話をした。父親達にさえ話していない秘密を打ち明けた俺だったが秋穂さんの答えはひどくあつさりしたものだった。

「うーん、すぐには信じられないけど、私を断るための嘘じゃなさそうだし……まあ、いっつか」

「いつかって。一応両親にも話してない、最大の秘密だったんですけど……」

「だって私が結城君を好きなことには変わらないんだもん」

真っ直ぐな瞳でそう言ってくれる秋穂さんに感謝の念と喜びでいっぱいだった。

「それに私だけに夢中にさせてあげる自信はあるんだから…… あっ、でも春菜に悪いか」

後半は小声だったがちゃんと聞こえていた。そうだ彼女にもちゃんと話さないといけない。自惚れじゃなければ、彼女も俺を慕ってくれているはずだ。

「もう他の女の子のこと考えたでしょ？」

額に軽い衝撃を感じて秋穂さんを見ると頬を膨らませて指を突き出していた。この手のことで女性の勘はずいと思おう。

「今は私といるんだからね。じゃあ、今から私たち彼氏と彼女？」

「はい。よろしくお願いします」

やったーと喜びを全身で表現していた彼女は動きを止めるとこっちを向き小首を傾げ彼女は風呂場から続くあの雰囲気醸し出しながら言った。

「じゃあ、お風呂場での続きしよつか？」

「続きつて？」

「もう…… えっちいことだよ」

「えっ!!? いや流石に早すぎじゃないですか!!? 付き合い出したの今さつきですよ

!？」

「だつてお風呂場であんなの見てから体が熱くて熱くて」

そう言いながら服を脱ぎ出した秋穂さん。頬は上気し熟れたリンゴのように赤く染まつている。目は虚ろで焦点が合っていないような気がする。風呂場では見えないようにしていた秋穂さんの芸術的なまでの裸体が目に入ってくる。その時俺の中で何か切れた音がした。

「どう?　　結城君?　　これでも体には自信が、つて、キャッ!」

冷静な判断ができないほどの興奮に衝動のまま彼女をベッドに押し倒す。

「ちよつと待って!　　私初めてだからせめて電気消させて、んむう　　」

彼女の制止の声も耳に入らず彼女に口付けをする。制止の声も段々と別の声に変わっていった。そして彼女への愛しさを胸に抱きながら彼女と愛を確かめ合った。

## 4話 仲良し3人娘と

俺が大人の階段を駆け上った後のこと、愛し合った俺たちは余韻に浸るように甘い微睡みの中2人してベッドに横になっていた。残っていた最後の理性と前世で育んだ技術で秋穂さんが痛がらないようにすることはできたと思うが、やはり興奮は治らなくなり無理をさせてしまったように思う。秋穂さんと交わってから自分でも驚くほど理性で興奮を押し留めることができるようになった。

「もう、結城君のバカ。あんなに凄いななんて思ってたよ。初めては痛いだけなんて聞いてたのに……」

「ごめんごめん。生まれ変わってからちよつと興奮が抑えられないようになってさ」  
秋穂さんが敬語はやめてほしいと言ったので普通に話している。

「なにそれ、ハハハ……あのさ。さつき言ってた、女の子に言い寄られたら応えちゃうって話、やっぱりいいよ?」

「え? 急になんで?」

「だって、どう考えてもあれを私だけで相手するなんてこの先体持たないしね。まだ実は満足してないんでしょ?」

「イヤ。十分満足したって」

「ウソ。さつきから偶に硬いの当たってるし。悔しいけどもう私はヘロヘロだから、私一人でなんて結城君が可哀想だもん……でも！　そういう人が出てきたらちゃんと紹介すること!!」

「それは勿論、辛い思いさせてごめんね」

「ううん。いいの。それ以上に幸せにしてくれるんでしょ?」

「それは勿論、地球で……いや、宇宙で一番幸せにしてみせるよ」

気怠さの残った空気の中にまたもやピンク色が混じり始めたとき、秋穂さんの家の電話が着信を知らせてくれた。秋穂さんは俺と顔を見合わせて笑った後、疲れの見える体を引きずって電話の元へ向かう。

「はい。西蓮寺です……はい、結城君なら雨が降ってきたときに一緒にいましたのでうちで雨宿りをしてもらっています……いえ、すいません。濡れてしまったのでお風呂に入れていたら連絡を忘れてしまいました……はい、雨が弱くなってきたら私が責任を持って送らせていただきます……はい、はい。それでは失礼します」

「どうやらウチから電話がかかってくるようだ。そういえば、買い物をしに出かけてたんだ。色々なことがありすぎて忘れてしまっていた。会話が終わったのか受話器

を置いてこちらに戻ってくる。

「秋穂さん、ごめんね。家に連絡するの忘れてた」

「ううん。私の方が今はお姉さんなんだから、しつかりしなきゃね。さつ、ドロドロになっちゃったしもう一回お風呂に入ろっか。今度はちゃんと洗ってあげるからねえ」

「それはわかったけど、秋穂さん体はもう大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫！ さつきちよつと眠れたからもう元気だよ」

いつもよりテンションの高い秋穂さんに手を引かれて本日2度目の西蓮寺家のお風呂へと向かう。この構図だけ見ると仲のいい姉弟にしか見えないだろう。ドロドロな体を除けばだが。

宣言通り隅々まで洗ってもらった。そのときにまた反応してもらってごそごそしたのは完全に余談だろう。

お風呂を上がった頃には、アスファルトを叩き割らんばかりに降っていた雨も弱まっていたので今度は傘を貸してもらい秋穂さんと共にウチへと向かった。送らなくても大丈夫だとは言ったが、お母さんとも約束したからと言われ、強引に付いてきた。なによりせつかくだしまつと一緒にいたいという気持ちが透けて見えていたので、何も言わずに付いてきてもらうことにした。俺としても一緒にいたい気持ちは一緒だったからだ。

「春菜のことなだけどね」

「西蓮寺がどうかした？」

聞いてみたはいいが、大体のことはわかつている。恐らく秋穂さんは妹の気持ちを知っているのだろう。さつきまでは幸せな夢見心地だったから良かったのだが、冷静に考えられるようになると罪悪感が湧き上がってきたんだと思う。こういう場合は話を聞いた方が話す方も自分の気持ちと向き合うことができる。

「春菜の好きな人のこと知ってる？」

「自惚れじゃなければ……」

「うん。直接聞いたことはないけど、そうだと思う。はあ、私妹の好きな人に手出しちゃったのかあ」

「俺から説明しようか？」

「いや、やっぱり私からした方がいいと思う。姉妹だしね」

「そつか。拗れそうになつたら俺のことを悪者にしてもいいよ？」

「ダメだよ。それじゃあ、私も春菜も結城君もみんな悲しくなっちゃう。でも、迷惑はかけちゃうかもしれない」

秋穂さんと西蓮寺のことで迷惑なんて思うことはないんだが、本当に拗れそうになつたら無理矢理にでも介入しよう。あんなに仲のいい姉妹が俺のせいで仲違いしてしま

うのはあまりにも悲しい。

決意している秋穂さんと他にも色々なことを話していると案外早く家に着いていた。楽しい時間はあっという間らしい。母さんと美柑が出迎えてくれた。秋穂さんは母さんや美柑と二言三言話したら帰って行った。本当は送って行きたかったがきりがないので断念した。

俺が買いい物を忘れてきたことを伝えると母さんは呆れ笑いを浮かべながら許してくれだが、美柑は拗ねてしまった。買いい物を忘れてきたことより秋穂さんと一緒にいたことに反応してしまつたらしい。自分が心配していた兄が女の人と仲良くしていたことが気に食わなかつたらしい。美柑は西蓮寺の家に連れていった時に秋穂さんに会つていて結構仲が良かったはずだがそれでもダメだったようだ。至極もつともなので母さんが苦笑いするほど全力で甘やかした。その甲斐もあつて今夜一緒に寝ることで許してもらえることになつた。

ご飯を食べてすぐにうとうととしていた美柑を寝かしつけた後に思うのは西蓮寺のことだ。今日は靄岡達とお泊まりをしているはずだから秋穂さんが話すとしたら明日か。明後日からは西蓮寺の様子をこまめに見るようによし。美柑の寝顔を見ながらそう思った。

俺が秋穂さんと結ばれてから2日目の朝、テレビの音をBGMに朝食を仕事でいない親父抜きで食べていると美柑が声をかけてきた。

「これって秋穂さんのところの高校じゃない？」

美柑の指差す先には生真面目そうな男性アナウンサーがニュースの原稿を読み上げているところだった。

『彩南町の迷惑防止条例違反の疑いで現行犯逮捕されたのは県立彩南高校の校長緒川賢二容疑者（54歳）です。警察によりますと緒川容疑者は昨夜10時ごろ、同町内にて経営されております、銭湯の女湯において大胆にも全裸で侵入し、覗き行為がバレ、逃げ出そうとしたところを銭湯に偶々居合わせた女性警官が取り押さえました。緒川容疑者は取り調べに対し「今まで大丈夫だったから今回も大丈夫だと思つた」や「私はただ覗きがこないように見張りをしていただけ」という意味不明の供述しており容疑を否認しています』

確かに秋穂さんの高校だった。派手なスーツにサングラス、蝶ネクタイといういかにも怪しい風貌をした男が写っている。全裸で侵入して逆に凄いな。秋穂さんは大丈夫

だろうか。彩南高校は今頃マスコミの対応に追われているだろう。

テレビでも彩南高校の生徒がインタビューを受けている。インタビューを聞いてみると結構これまでもこの校長はやらかしてしまっていたみたいだ。なぜ捕まらなかったのだろう。彩南町の住人達はおおらかというか小さいことはすぐに忘れてしまうような穏やかな住民性のため今まで事件にならなかったのだろう。

「いやねえ、美柑も気をつけるのよ？ 最近は何歳の子も狙われることがあるって聞くしね」

「私は大丈夫だよ！ リトが守ってくれるもん！」

妹の期待がすごい。まあ、美柑の為なら一般人には使うなど師匠に言われている秘技を使ってでも守り抜こう。朝から覚悟を新たにしていた俺はいつものように美柑と2人で登校した。

「結城君!!」

教室に入るやいなや大声で声をかけて来たのは西蓮寺だった。週末の学校で怠そうな皆を驚かせるには十分な音量だった。おとなしい彼女にしては珍しい大声だがおそらく理由はあのことだろう。

「おはよう西蓮寺」

「あつ、うん、おはよう…… それで今日うちに来てくれる？」

「ああいいよ。俺も話さないといけないことがあるし」

交わす言葉は少なかったが、真剣な西蓮寺の様子に気を引き締める。俺には彼女と向き合う義務がある。

その日の学校では何事もなく過ぎていった。彩南高校の校長が逮捕されたから提携校であるうちの小学校でも何かあるかもしれないと思っただけだった。

「結城君いこ？」

夕日が差し込む教室で俺に声をかけた西蓮寺と一緒に彼女の家へ向かう。何故か稲岡と沢田も付いて来た。理由を聞いて見たら秋穂さんに呼ばれたらしい。何故だろう？あの話をするだけなら西蓮寺だけでいいはずなんだけど。

西蓮寺の家への道のりは驚くほど静かだった。いつもは騒がしい靱岡や沢田でさえ口数が少ない。不思議に思っただけ2人を見るが俺と目が合うと顔を赤くして目をそらしてしまう。

「お姉ちゃんだいま」

最初に家に入っていた西蓮寺に続いて俺たちも挨拶をしながら入って行くと秋穂さんは既に待っていた。両親はまだ帰ってこないらしい。

校長のことで大丈夫だったか聞いて見ると学校全体がついに捕まったかという空気

で特に支障は出てないらしい。学校全体にそう思わせるなんてある意味信頼されていたらんだろうか。

話をするために秋穂さんの部屋へと5人で向かった。着いてみんなが座ったタイミングを見計らって俺は一番気になっていたことを秋穂さんに聞いた。一応敬語で。

「ところでなんで糰岡達がいるんですか?」

「その前に結城君こっちに來て?」

俺の疑問を華麗にスルーした秋穂さんに呼ばれ近づくと唐突にキスされた。

「ちよつと!」

こんなことをしたら西蓮寺が!と思って西蓮寺の方を見ると思っていた反応とは違つて顔を真っ赤にしながらこちらを見ていた。糰岡や沢田も同様の表情でこちらを見ている。秋穂さんが固まっている3人に話しかける。

「ほらね? いった通りだったでしょ?」

「秋穂さんどういうことですか?」

「昨日ね、この子達を呼んでいろいろ説明したんだ。私が結城君と付き合つてることとキス以上のえつちいことをしたつてこともね」

「それとキスすることがどう関係あるんですか?」

「キスしたのは本当だつて証明したかつただけ。それでね、説明した後、みんなで結城君

を共有しないか? って提案してみたのよ」

「へっ?」

驚いて西蓮寺を見てみると首を縦に勢いよく振っていた。他の2人も同様だ。

「えっと、どういうことだ?」

西蓮寺はともかく、糸岡と沢田はなんでそんなことに

なってるんだ?」

ともかくって何!? と大声で叫んでる西蓮寺はこの際置いておいて2人に困惑した視線を向けると2人はまだ顔を赤くしたまま固まっている。

「もう。結城君って鈍感なわけじゃないんだけど、女心ってものがわかってないなあ。2人とも結城君が好きだったってだけの話だよ」

疑問に思うもそれ以外の理由は思いつかなかった。

「そうなのか? 糸岡、沢田」

糸岡と沢田は顔を向き合わせて小声で何かを囁いていた。暫くして意を決したように糸岡から話し出す。

「私は結城のことが好きだよ? 他の男子達とは比べられないくらい頼りになるし」

「私も好き。私のファッションの話とかずっと聞いてくれるし、話も合うしね」

「そう……. だったのか、ごめん。今まで気づけなくて」

糸岡から引き継いだ沢田もそう言ってくれる。本当に好きでいてくれるならとても

嬉しいのだが彼女達はまだ小学生だ。早すぎる気がする。しかも相手がこんなに悪い男で複数同時だなんて。

「結城君、私も好きなんだよ？」

「それは知ってたけど……」

「知ってた!?! なんて!?! そんなにわかりやすかったかな? 私……」

「春菜。あんたあれで誰にも気づかれてないと思ってたわけ? 多分クラスの全員気

づいてたわよ」

昀岡の言葉で魚のように口をパクパクさせ始めた西蓮寺。いつもの空気が戻って来たようにで安心していたが、言っておかなければいけないことがある。

「あのさ、3人も…… 3人はまだ小学生なんだし。もうちょっと大きくなつてからでも遅くはないんじゃないか? せめて中学生になつてそれでもまだ俺のことを

好きでいてくれたら付き合うとか」

「何言つてんのあんたも、小学生なのに秋穂さんの彼氏なんですよ?」

「いや、実は……」

昀岡の指摘を受けて、俺は3人に自分には前世の記憶があることを話した。前世の事についてペラペラ話しているかもしれないが、この3人なら大丈夫だという身勝手な信頼を寄せている。

「はあく、凄いいこともあるもんねえ」

「本当だねえ。びっくりしちやった」

「だから、大人っぽかったのかな？」

「柗岡、沢田、西蓮寺の反応も先日の秋穂さんのように軽いものだった。俺を好きになつてくれる人たちは前世の記憶を持つている人間に対して寛容すぎる気がする。」

「だから、3人は今焦る必要はないと思うんだ。俺なんかよりもっといい人が現れるかも……」

「そこまで言った時に西蓮寺がずっと顔を寄せて唇にキスをして来た。赤く染まった頬を気にもせず俺の目を見つめてくる。そして秋穂さんの妹だと印象づけるような悪戯な笑みを浮かべながら言った。」

「結城君、私たちは結城君が好きなの。それにね、女の子は今を生きてるんだよ？ 将来のこととかよりも今好きな人と一緒にいたいんだよ？」

「後ろの方で柗岡たちから西蓮寺を茶化す声が聞こえる。西蓮寺の顔がますます赤くなつていくが俺の目から逸らすことはしない。」

「はあ。分かった。そこまで言われちゃ断れないよな。将来3人が俺のことを選んでよかつたって心から思えるように頑張るよ」

「はい、話はまとまったわね？ じゃあ、これからの予定を決めましょう？」

「これからの予定って何？ お姉ちゃん」

今まで静観していた秋穂さんがぱんつと小気味好い音を立て手を鳴らしみんなの注目を集めた。

「結城君を共有するにしてもデートしたりとかいろんなことをする時間が被っちゃったりしないようにみんなで時間を決めるのよ」

「そういうことなら美柑の時間を多くもらってもいいかな？

いし、できるだけ一緒にいる時間を取ってあげたいんだけど」

「うんうん、相変わらず家族を大切にできる子ねえ」

秋穂さんは先日のように頭を撫でて来たりせず代わりにキスをしてくれた。

「ちよつと春菜達2人だけずるいんじゃない？ ねえ、未央」

「そうそう。秋穂さんと春菜だけキスしちゃってさ。私たちにもご褒美欲しいな」

そう言ってくれたので2人にもキスをした。未央は恥ずかしさよりも嬉しさが勝ったようで嬉しそうに微笑んでいる。その表情は見ているこっちも幸せになる。靱岡は自分で言い出したのに恥ずかしかったようだ。照れた表情も可愛かった。

気持ちの通じ合った俺たちだったが浮かれてばかりもいられない。今の俺たちにはいちばんの難関が存在するのだ。そう、親への挨拶。普通の恋人同士でも場合によつて

は一触即発の空気になる挨拶は俺の場合、4股という事実が難易度をさらにあげる事になつてゐる。

その次の日、俺はまず自分の両親へと話した。当然親父には殴られたり叱られたりしたが、相手の親御さんへの説明に付いて来てくれる事になつた。俺がお前を許すかどうかは相手の親御さん次第だと言われたから。

それから俺たちは4人の親御さんの元へと向かい、両親とともに頭を下げ続けた。両親に頭を下げさせる事に申し訳なく思ったが、西蓮寺と里紗の家ではそこまでの事態にはならなかつた。自分の娘が大切だが信じてみると、その娘が選んだ子なら大丈夫だろうと。もちろん娘を大切にしてくれと頼まれたが直ぐに了承した。西蓮寺家に至つてはアドバイスいうなただの惚気を聞かされたぐらいだ。

問題だつたのは未央の家だ。彼女の父親は結構厳格だと未央に聞いていたので波乱の予感はしたがその通りになつた。説明の途中で殴られボコボコにされた。あまりの事に未央の母親とうちの両親、未央が止めに入ろうとしたが、皆には口出ししないように告げ、頭を下げた言葉を続けた。将来のことや自分が今考えていること、彼女たちへの真剣さ。次々と溢れる言葉を放っていると突然拳の雨が止んだ。

一応、俺の真剣さだけは認めてはもらえたらしい。そしてせめて中学までは清い交際を続けることを条件に許してもらえた。聞けば彼女の父親は若い頃に相当やんちゃを

していたそうで自分の娘にはそうならないような人生を歩んで欲しいと思っていたという。俺が小学生にしてはいろいろ真剣に考えていると思ってくれたようだ。もちろん許したといっても今の時点だけで娘を悲しませたら殺すとまで言われた。目が本気だったのでこちらも覚悟を持って領いた

ポロポロになりながら、未央に見送られて未央の家を後にした。家に帰ってからも両親とくれぐれも相手の子を悲しませる事だけはしないという約束を交わした。こうしてポロポロになりながらも、なんとか彼女たちのことを許してもらった。俺はポロポロの体で泥のように眠った。

## 5話 悩める乙女と新たな家族

新しく3人が俺の彼女になってくれてからは偶に4人とデートしている以外では普通の生活が続いている。美柑との時間のために4人という時間が減ってしまっているのは申し訳なく思っているが、まだ美柑は小学2年生なのでできるだけ一緒にいてあげたい。その気持ちを分かってくれた4人には感謝をしている。その代わりデートの時は存分に甘えさせてあげるといふ約束をさせられたがもともとそのつもりだったのでなんの問題もなかった。

「リト。最近西蓮寺たちと特に仲良くねーか？」

「まあ、色々あつてな。仲良くなつたんだよ」

夕暮れの教室、下校しようとしていた俺に猿山が話しかけて来た。なんだよ、色々つて、と言いながら肩を組んでくる猿山にごまかしながら訳を話す。同時に複数の女の子と付き合ってる現状は十分おかしいと思うが、疚しいところはないので隠してはいない。それでも言いふらすことでもない、と自然にバレるまでは言わない方向で彼女達との間で決まっている。

猿山の追求を躲して下校の待ち合わせをしていた美柑が待っている校門へと向かう。

玄関を出ると既に待っていた美柑を見つけて歩き出す。夕陽のさす校門に寄り添いながら物憂げな表情をしている美柑は兄の鼻肩目を抜きにしても可愛らしかった。

「待たせてごめんな、美柑」

俺が声をかけると先ほどまで沈んでいた顔を輝かせ走り寄って来て、俺の腕に抱きついた。俺が彼女達と過ごす時間が増えて来てから美柑はよく俺に甘えてくるようになった。

前までは恥ずかしがって外で抱きつくなんてことはしなかったのだが、最近是一緒にいる時は常に手を握ったり、今のように抱きついてくる。彼女達の事は美柑には話してないのだが、美柑は何かに勘付いたのかもしれない。兄を取られると思ってくれているのだとしたら兄冥利に尽きるのだが、何時迄も兄離れをしていないと友達と過ごす時間が減ってしまうのではないかと不安にもなってしまう。

「美柑はいつも俺と帰ってるけど、偶には友達と遊んだりしないでいいのか？」

「心配しなくても大丈夫だよ。私友達付き合い上手い方だし。休みの日とかに遊んでるんだから。それよりも私はリトが心配だから一緒に帰ってあげてるの」

だから行こっ？と俺を引っ張る彼女を見ると本当に大丈夫そうだ。美柑はこの歳にしてはしっかりしているし、俺が心配することでもなかったかな。

日が落ちるのが早くなったとはいえ小学生が帰る時間はまだ明るい。美柑と話しな

がら帰っているといつも美柑と遊んでいた公園のベンチに俯いたまま座っている女子高生を見つけた。彩南高校の制服じゃなさそうだ。賑やかな公園の中で彼女だけが浮いて見えた。

「美柑……」

美柑は俺の目線の先を見て察した表情をした後、やれやれしようがないなあ、と声に出した。これだどどつちが年上かわからないな。美柑が抱きついていた腕を離れたのを見てそちらに歩いていく。

「こんにちわ、お姉さん」

「こんにちわー」

「えっ?」

彼女は俯いていた顔をあげてこちらを向いた。高校生にしては童顔の彼女は先ほどの雰囲気も合わさってひどく儂げに見えた。

俺たちが声を掛けると彼女は自分だとは思っていなかったのかキョロキョロと周りを見回した後、自分だと気付いたようで挨拶を返して来た。戸惑う彼女を尻目に失礼しますと断って美柑と一緒にベンチに座る。基本は美柑と話していたが偶に彼女に話しかけ会話をしやすい空気を作る。いきなり訳を聞いても見ず知らずの俺たちに話してくれるわけがないと思ったからだ。

「さつきはなんで俯いてたんですか？」

やっと笑顔を見せてくれ始めた彼女にそれとなく聞いてみた。

最初は悩んでいた彼女だったが、話して見るだけでも楽になるかもしれないと彼女に言うとおずおずと話し始めた。

どうやら彼女はまだ高校一年生なのだが、自分の進路が決まっていならしい。周囲が進路に向かって勉強を始めた中で夢も進路も決まっていない自分に不安を覚えていたようだ。

「私得意なことかかないし」

そういう彼女はまた俯いてしまった。

「焦ることはないんじゃないですか？」

ありきたりすぎて使い古された言葉だとは思いますが、彼女は不安になるあまり気持ち先を行き過ぎている。根が真面目なのだろう。

「夢を持つことって凄いいことだし、カッコいいことだとは思うけど、焦って夢の持ち方を間違つて、夢を限定しすぎてしまうといつか現実との違いにギャップを感じて挫折してしまつたりするんです」

こんな小学生の言葉を彼女は黙って聞いてくれている。

「将来を決める上で必要なのは自分の幅を広げていって、自分が本当は誰の役に立ちた

いのかをはつきりとさせることですよ。よく夢を持つ時に自分のやりたいことを思い浮かべる人がいるけど、仕事をしていく中で自分のためだけに始めた人はどうしても嫌な事や退屈な事が出来た時にモチベーションが続かなくなっちゃいますからね」

前世でもこういつた相談は苦手だったが、自分なりに話してみる。

「ネガティブにならずに今までの人生で一番楽しかった事を考えたり、その事に関係するボランティアだったり、アルバイトだったりをして自分の本当のやりがいを見つけていくといいんだと思います。それが見つかるとまでは勉強あるのみですね、せつかく見つけたやりがいが勉強がでしなかつた所為で活かせないなんて悔しすぎますから」

「へえ、なんだか凄いな。小学生なのにしっかりしてる。でも……うん、ありがとう。自分なんかなんて思わずに自分なりに色々考えてみるわ。」

彼女は感心したような視線を向けてくる。途中から今は自分が小学生だということ忘れてしまっていた。まあ、彼女がさっきの言葉で感じてくれることがあったらよかったのだが。

「そう言えば自己紹介とかもしてなかったわね。私の名前は新田晴子」

「僕の名前は結城リトです。こっちが妹の……」

「結城美柑です」

「それにしてもすごいわね。結城君は小学生なのに色々なことを考えてるのね」

「リトは凄いいんですよ?」

「今までの人生で色々あったただただだけで」

「しょ、小学生でなんて重みのある言葉……」

世界中を探しても転生した経験のある人なんて俺くらいのもんじゃ無いかと思う。

それからは雑談したり、美柑との遊びに付き合ってもらったりした。

流石に小6の男子と女子高生がおままごとに興じる姿はどうかと思つたが、晴子さんは嫌な顔一つする事なく付き合つてくれた。彼女は子供の相手をするのが上手くて美柑が終始楽しそうにしていた。将来はそういう道も向いているんじゃないかと思つたが、ここで言つても混乱させてしまうだろうと思つたので言わなかつた。

「今日は色々ありがとう。おかげで元氣も戻つたわ」

「いえ。お役に立てたならよかったです。こちらこそ一緒に遊んでくれてありがとうございませす」

「それじゃあまたね、晴子さん」

別れる時には最初見たときの憂鬱そうな表情は全く見せなかつたので大丈夫だとは思ふが、一応連絡先を交換して別れた。彼女には色々な人の意見を吸収して自分のものにしてもらいたい。

「じゃあ、帰るか! 美柑」

「うん！」

再び抱きついて来た美柑に苦笑しながら、家へと向かう。帰ったらさっきの事について両親にも聞いてみよう。彼女の悩みはまだまだ続くけれどより良い未来へと歩めるように心から祈っている。

「リト、晴子さん見る時、鼻の下伸ばしてたでしょ？」

「の、伸ばしてねーし！」

祈っている。

その日もいつものように美柑と下校していた。一つ違うのは春菜がいる事だろう。いつも利用している商店街で買わなければいけないものがあつたので荷物持ちがわりについて行く事にした。

「結城君。重くない？」

「これでも結構鍛えてるからね。このくらいじゃ全然平気だよ」

一通りの買い物を終えた俺たちは春菜の家に向かっていた。両手には食材の詰まったビニール袋がある。今夜は久しぶりに家族全員が揃うらしいので豪華な夕食を振る舞うそうだ。それでも買いきなげな気がするけど西蓮寺家の普段の台所を取り仕切つて

いる春菜が言うのなら間違いはないのだろう。正直言つて結構重いが、男は意地っ張りな生き物なのだ。ここでそんな弱音は吐けない。

乳酸の溜まって行く腕と葛藤しているとどこからか何かの鳴き声が聞こえて来た気がした。

「?」 美柑、春菜何か聞こえなかったか?」

「ん?」 何も聞こえなかったけど」

「うん私も」

美柑と春菜が聞こえなかったのなら気のせいかと思ひ歩みを進めようとするもまた今度はさつきよりも幾分ハッキリとした鳴き声が聞こえた。

「ほら!」 また!」

「私も聞こえた!」

「犬の鳴き声かな?」

鳴き声のした方へ向かつて見ると犬が一匹倒れていた。傍から見たら眠っているだけのように見えたが、近づいて見ると細かな傷を負っていることがわかる。この種類は確かボストンテリアだったはずだ。寒さのせいか体も震えている。そこからの判断に迷いはなかった。両手のビニール袋を一旦下ろすと来ていたジャンパーを脱ぎその犬を包んで抱きかかえる。抱きかかえると同時に今までかろうじて繋いでいたのである

う意識を手放してしまった。

「悪い！　春菜！　帰るの遅くなりそうだ！　

美柑俺の携帯で近くの動物病院の場

所を調べといてくれ!!」

「了解!!」

「私は全然平気！　それよりワンちゃんは大丈夫?」

「俺じゃあ詳しい事はわかんないから、急いで連れて行こう」

　買い物袋をそのままにはできないので春菜に犬を抱きかかえてもらう。さつきまでの疲れなんて嘘のように吹き飛んでいた。

　美柑のナビに従って急いで行くと10分もしないうちに動物病院へとたどり着いた。

　一息つく間も惜しんで先生に診てもらおう。今頃になって何故あんなところであんな怪我をと疑問が思い浮かぶが、今はあの犬の無事を祈るのみだ。

　先生が俺たちを呼んだ。長い間待っていた気がするが実際は10分もかかっていなかった。

「大きなキズはありませんでしたが、寒さと空腹からひどく衰弱していました。首輪は付いていたんですが、この街では野良犬は少ないですから、犬が逃げていた場合、すぐに見つかるはずなんです。この様子からして何日も何も食わずに彷徨っていた事は間違いないので、おそらく捨て犬だったんだと思いますよ」

きいてみるともうすぐ卒業シーズンが来るこの時期は新生活への足枷となってしまう飼犬を捨ててしまうケースが多いのだそう。この犬の傷の中には明らかに人の手によるものもあったそう。その理不尽さに怒りがこみ上げて来るが今は関係ない感情だ。2人を見れば悲痛な顔をしている。

「ウチで飼います」

春菜が目赤くして眠っている犬を見ながら言った。並々ならぬ決心をしているようだ。俺も飼い主がいなければ、自分の家で買うつもりで助けたのだが。

「大丈夫か？」

「うん、この子は私が面倒見てあげたい」

そのあと回復するまでは病院で預かっていてもらうという事で予定通り春菜の家まで荷物を届けて帰った。

数日後元気になったと病院から知らせを受けたので春菜と一緒に病院に向かった。

春菜は病院に着くとすぐにあの子の元へと向かった。よっぽど心配だったのだろう。

先生と少し話した後あの子を見つけた春菜は近づいて行って抱きかかえようと手を伸ばした、その時ガブリと犬が春菜の手に噛み付いてしまった。

「春菜!!」

「大丈夫だよ。結城君」

春菜は嘸まれて血がにじむ手を気にもせずとその子を抱きしめた。

「ゴメンね。いっぱい悲しい思いをしたんだよね。苦しい思いをしたんだよね。でも、これからは私といっぱい幸せになろうね」

春菜の言葉が通じたのか。それとも想いが通じたのか。春菜の腕の中でその子は鳴いた。それが俺には人の鳴き声のように聞こえた。辛かった思い出を洗い流すような鳴き声に。

こうして春菜に懐いた犬は「マロン」と名前を付けて貰って西蓮寺家の一員として無事に迎え入れられた。

俺もちよくちよくマロンと遊びに行くようにしているが、なかなか俺に懐いてくれない。春菜にひつつく悪い虫だと思われてるのかもしれない。いい判断力をしているのだ。それでも春菜を守る騎士のような振る舞いのこの犬を俺は嫌いになれないのだ。た。

## 6話 デートな彼女と高貴な彼女

美柑との時間を多く取ってもらっている俺ではあるが、当然彼女達との時間も大切にしている。

「ごめん、待った？」

「いや全く。じゃあ、行こうか」

今日は春菜とのデートの日だ。春菜はいつもの髪留めをして落ち着いた色合いの彼女らしい服装で現れた。美柑は友達と遊びに行つたし、秋穂さんは卒業式の準備やらで忙しそうで、里紗と未央は2人で買い物に行くと言っていたので今日は春菜と2人だけのデートだった。

デートの日にはやらを色々決めた俺たちだがなんだかんだ言つて2人きりのデートというのはなかなか珍しい。それというのも、それぞれが時間が空いたら色々口実を付けて一緒に来て来ちゃうのだ。

「今日は買い物行こうか」

「何か買いたいものがあるの？」

「もうすぐ卒業式だろ？」

皆んなの分のプレゼントとか買っておきたくてさ」

「そっか。じゃあショッピンモールに行こっか？」

手を握って歩き出す俺たちは寒い季節にもかかわらず暖かい雰囲気醸し出していた。通りすがりの人たちがこつちを見て微笑ましげな表情をする。たまに舌打ちをする人もいるけど。

2人であれこれと意見を出し合いながら、ショッピングを楽しむ。女性は買い物から性からは考えられないほど長いとよく聞くけれど、好きな人と一緒ならどんな事でも楽しく思えてしまう。

「これなんかマロンに買ってあげようかな」

「どれ？」

あの寒い冬の日に西蓮寺家に迎えられたマロンは暖かな家族に触れたおかげか、初対面の人が相手でも吠えたり威嚇したりしなくなった。俺のことはまだまだ許せない存在のようで結構吠えられているのだが。

「まだ寒いし。こういう犬用の服とか」

「ああ、可愛い！ マロンに似合うかも」

そう顔を綻ばせる春菜はマロンに服を着せたときのことを考えたのか、喜びに目を輝かせた。

マロンの服を買って他の店へと行く。春菜へのプレゼントはさつきちよつと離れた隙に買っておいた。本人の前でプレゼントを買うのはなんか違うと思つたからだ。

「おお、これとか秋穂さん好きそう。……これとこれは里紗と未央だな」

俺が3人に良さそうなプレゼントを選んでいたのだが春菜が静かになつたのでそこらを見てみると、春菜は頬を少し膨らませてこつちを見ていた。どうにも3人のプレゼント選びに夢中になりすぎて、少し面白くなかつたようだ。春菜が頬に空気を入れて睨んでいるのだがそれは怖いというより可愛いと思つてしまう。衝動のままに頬をついて見た。

「もう！ なにするの?」

ふしゅーと間抜けな音を立てて口から空気が抜けてしまった春菜は恥ずかしかったのか顔を赤らめぶいっと横を向いた。

「ごめんごめん。今は春菜といふんだもんな」

「そうだよ? 私のこと忘れてたでしょ?」

「一緒にいるのに忘れるわけないって。その証拠にほら」

さつき買ったプレゼントを取り出す。本当はもつと後であげたかったが、今渡さないと不安にさせてしまうかもしれない。

「卒業式のプレゼントの他に春菜にはもう一個買っておいたんだ。もうすぐ誕生日だか

らね」

「えっ!?! 覚えててくれたの?」

驚きに近いほどの喜びを表していた彼女だったが、差し出されたプレゼントをおずとお受け取ると、開け出した。

「わあ。ティーカップだ。可愛い」

プレゼントしたのはお洒落な花びらがあしらわれた紅茶用のティーカップだった。彼女は紅茶を飲むのが好きなのでこれにして見たが反応からして喜んでもらえたようだ。

「本当にありがとう」

「これからも嫉妬とかさせちゃうかもしれないけど、俺はみんなのことを真剣に幸せにしたいと思ってるから」

言いながら抱きしめる。周囲からの視線が強くなった気がするが、気にしない。

その後流石に周囲の視線に気づいたのか、春菜は俺の手を取って店を飛び出した。

「もう見られてたなら言つてよ」

そう言つてプリプリ怒る春菜だが顔は緩んでいる。恥ずかしかつたけど、それ以上に嬉しかつたと言つてくれた。彼女たちの笑顔のためならなんだってできる気がした。

夕飯の支度をしなければならぬという春菜を送って帰路についているいつもの公園から誰かの言い争う声が聞こえてきた。よくよくトラブルに見舞われる公園だと思いつながら、そちらへと足を向けた。荒事になりそうな時、美柑や春菜たちがいる時は万が一の為彼女たちには待つていて貰うのだが、今日は一人なのでそんな心配もない。

公園の中央に向かっていると争う声が大きくなり始めた。慌ててスピードを上げると言い争っていたのは3人の女の子と複数の男子高校生らしき人影だったことが確認できた。年下の女の子相手に複数で何をやってるんだと腕力しそうになったが、そうも言つてられない事態になった。頭に血が上った男子高校生の一人が拳を作つて腕を振り上げたのだ。それを見た瞬間短い縦ロールを巻いている女の子と殴りかかろうとしていた男子高校生の間に割つて入った。

避けることは後ろに彼女たちがいるので出来ないし、拳を止めたら逆上して余計に興奮するかもしれないと思つたので、刹那の間に拳を受ける方向に切り替えた。拳を頬で受け止めた。振りかぶっていた仕草から武道は学んでいない素人であることもわかつていたので受けたが、流石に体格差があると受け流していても衝撃は大きかった。口の中で血の味がする。

「落ち着いてください」

明らかに小学生だと思われる男子を思いつき殴つてしまったことを認識した男子

高校生が顔を青白くさせて狼狽え始めた。

「たつちゃん、やべーよ。そいつワシツんとこのちよーつええ結城つてやつだよ！」

「なっ！　あの回避の魔術師と噂のやつか!？」

ちよ!?!何その恥ずかしい二つ名!?!いつからだ!!内心悶えていると高校生たちが慌てて逃げ出していった。あれ以上の騒ぎにならなくてよかったのだが、心に要らない傷を負ってしまった。しかし、今はそれよりも優先することがある。

「大丈夫でしたか?」

「ああ、ありがとう。君はどうやらすごい人のようだな」

ああ忘れたいのになそこをいじつてきますか?」

話しかけてきたのは意志の強そうなツリ目がちの目をしているポニーテール女子だった。彼女は明らかに武道を嗜んでいる身のこなしだ。俺が入るまでもなかったかなと思しながら、他の2人を見つめる。1人は丸眼鏡をかけた小動物のような女子だった。彼女は俺が視線を向けた瞬間にびつくつと震えるとポニーテール女子の後ろに隠れてしまった。さつき怖い思いをしたばかりなのだから、知らない人は怖いのだろう。別に傷ついてなんかない。

そしてさつき殴りかかれていた縦ロール女子はいかにもお嬢様といった風貌だった。気品のある顔立ちはしかし今はポカンとだらしなく口を半開きにしていて惚けて

いる。

もしや何かあったのかと思い、声を掛けてみると顔を引き締め口を開いた。

「助けていただいたに感謝してしますわ。お名前を……お名前を伺ってもよろしいですの？」

「結城リトですけど」

「ああ、リト様と仰るのですわね！　あなた様にぴったりの勇敢なお名前ですわ!!」

「流石に歳上の女性に様付けをされてしまうと落ち着かないのですが……」

「助けていただいた殿方に敬意を示すことに何かおかしいことがございましたら？」

「いいえ！　ありませんとも!!」

「凄いい人だ。イメージ通りのお嬢様に苦笑いが浮かぶが、悪い人ではなさそうだ。」

それから3人は自己紹介をしてくれた。ポニーテール女子が「九条凜」、小動物系女子が「藤崎綾」、縦ロールお嬢様が「天条院沙姫」というようだ。俺よりも一歳歳上だったらしい。

3人に争っていた理由を聞いてみると彼らは昔藤崎さんを虐めていた子達の兄で天条院さんたちが弟を懲らしめたことから絡んできたらしい。

どこにでもやんちゃな子はあるなと思いつつながら、話を聞いていた。未だに藤崎さんは俺とは九条さん越しにしか話してくれない。仲良くなるには時間がかかりそうだ。

世界は自分を中心に回っていると云わんばかり天条院さんの態度だが、すごく優しい子なのだろう。そう思うと微笑ましくなった。

「? なぜ笑ってらっしやるのですか?」

「いえ、天条院さんは優しいんだなと思ひまして」

「そうなんです! 沙姫様は本当にお優しいんです!!」

先ほどもで九条さんの背中に隠れていた藤崎さんだが、天条院さんの話になった途端、身を乗り出してきた。直ぐにまた顔を赤くして引つ込んでしまったが、本当に天条院さんを慕っているのだろう。

「私が優しいのは当たり前ですわ!! 優しさクイーンですもの!! それよりリト様

天条院はおやめになって下さいな。リト様に天条院と呼ばれるとなぜか胸が痛いんです。沙姫とお呼びになって」

「胸が痛い? よく分からないけど分かりました。沙希さん、これでいいですか?」

「ええ! ええ! 宜しいですとも!!」

太陽のような笑顔を見せる沙姫さんに癒されていると、沙姫様がお許しになるならと九条さんと藤崎さんも名前呼びを許してくれた。綾さんは名前を呼ぶと湯沸かし器のように一瞬で沸騰してしまうので慣れるまで大変だ。それからは一応さっきの高校生たちが戻ってくる可能性を考えて一緒にいることにした。

一緒に遊ぶことになった俺たちだが、沙姫さんは何にでも全力だ。カラオケに行けば100点が出るまで挑戦し続け、ボーリングに行けばパーフェクトが出るまで投げのをやめない。今いるゲームセンターでも全てのゲームでトップのスコアを出そうと頑張っている。流石に無理そうだったら九条さんが止めるのだが、なんでも一番でないと気が済まないらしい。段々普通に話せるようになった綾さんが言うには天条院家は世界的な財閥で幼少の頃から天条院家の令嬢に相応しい英才教育を受けていてなんでも一番を目指すようになったそうさ。

令嬢にはお淑やかさも必要だとは思いますが、この何事にも全力投球などころも沙姫さんのいいところだろう。沙姫さんがねだったので連絡先の交換をしているとふと気になったように俺の手に持っているものについて聞いてきた。

「そう言えばリト様は何を持っていらっしやいますの?」

「ああ。これは彼女への卒業プレゼントで……」

その時したから甲高い音が響いた。音のした方をみると沙姫さんの携帯が落ちていた。どうやら落としてしまったらしい。携帯を拾い上げ沙姫さんに渡そうと彼女の方を見るとギョツとした。沙姫さんが両目から涙を流していたのだ。彼女は呆然としていて自分が涙していることにすら気づいていない。

「沙姫さんー!」

慌ててハンカチを差し出すと受け取ってくれず、まだ心ここに在らずといった状況だ。九条さんたちも堪らず声をかける。

「私泣いているんですの？　なぜでしょう。胸が……痛いですの」

ほろほろと零れ落ちる涙を気にもせず、沙姫さんは呟いた。騒がしいゲームセンターで俺たちのいる空間だけが切り取られたように静かだった。

「沙姫様、病院に行きましょう！」

尋常でない沙姫さんの様子に凜さんが取り乱しながら、どこかへ連絡をし出した。数分も経たないうちにゲームセンターの前に黒塗りの車がやって来た。付いて行きかけたが、ドライバーに断られてしまったので乗ることはできなかった。凜さんが何か進展があれば連絡するといってくれたのが唯一の救いだった。